頼みは食糧危機だけだね

日本は貧しき農業国の道を

野坂昭如

——石油危機というのは、根本的にこっち側の気持を変えるということには結びつかなくても、一時の対症療法というか、破滅を少し先にのばすという意味では結構な話だし、それをきっかけにして、今迄の物質文明だけに頼るんじゃなくて、もっと違った個性的な楽しみ方というものを発見できれば、そこから何か活路が見出されるんじゃないか、という思いはしたわけだけど、結局は石油危機なるものはむしろ逆の方に目が出ちゃって、〝石油危機は神風だ〟なんて思ったのは浅はかだったんですよ。

——トイレットペーパーと洗剤というのは、大変面白いところがなくなったわけですよ。トイレットペーパーっていうのは食い物の後始末のところでしょう、洗剤は着てアカが出た後始末のところで、全部後始末のところで物がなくなったんですよね。口に入れるとかそういうところで危機が来てればもっと深刻だったんだろうけど、後始末のところだからそれ程深刻ではないにもかかわらず、焦りだけは出て来るわけですよね。トイレットペーパー騒ぎが作られたものであろうがなかろうが、狂奔したのはごく当然な人間の自己防衛本能だと思うし、あそこのところは、じゃあ節約すればいいかっていうものじゃないでしょう。勿論、代用品はいくらでもあるけど、なかなか発想の転換なんて出来ないものでしょう。実際にはトイレットペーパーがなければ水で洗って手を振って乾かしてもいいわけだし、化学繊維は羊毛とか木綿と違って汚れが中に入っていかないから洗いやすいわけだし、食器は油っぽいものが付いているから洗いにくいけれど、油がいくらくっついていたって、そのために人間死ぬわけないしね。全部あれは不潔感という感触からきているので、本当になくなってしまうんなら、あれはあれでどうってことなかったんですよ。でも、中途半端にあるみたいなことがあったからパニックが起こっちゃった。結局、それをきっかけにしてこっち側が考え直すなんてことはできなくて、向う側が利益ではかるということになったわけですよ。

——ただ、僕は商社が利益をはかるということを言ってみても仕方がないと思うんですよ。利益が薄くて値上げしにくかったのを、この機会にバッと値を上げようというのは商社というか問屋というか小売店というか、本能みたいなものでね、そこらへんをいちいち責めてもしょうがないと思うんですよ。

それよりも全体として、見通しがなくてウロウロする政府のみっともなさ、為政者から僕らみたいな年代も含めて島国である日本本来の地理的環境を忘れてしまっていかに思い上っていたか、ということは良くわかったけれどもね。

結局今、世間一般に残ったのは、やはり物が沢山あるというのは大変結構なことである、という考え方ですよ。たしかにそれは真実なんだけど、物が沢山あるということには限界があるということを忘れてしまって、ただ目の前に物が沢山あれば心は豊かになるし、そのためには人のことなんかかまっちゃいられない、という考え方になってしまったと思うんですよ。

——花森安治も言っているけど、我々はその日暮らしにさせられちゃったでしょう。日本列島そのものがその日暮らしであるように、庶民の暮らしもその日暮らしなんですよ。例

えば昔の便所で言うならば、仮りに紙がなくたって、そこらのどんなものを使ってでもひと月は落とし紙に不自由はしなかった、と思うんですよ。それに冷蔵庫がなくても、どこの家でも米はひと月分ぐらいは持っていたし、パンとかかき餅とかあったしね。洗剤の方でいうと、イザなくなれば水だけで洗う、といった考え方の上での備蓄があった。でも、今の我々の生活には備蓄というものが、買い置きというものがないんですよ。

家が狭いということもあると思うよ、団地の中じゃとても買い置きできないものね。買い置きができなかったら、これは鼻ヅラひきずりまわされたってしょうがないよ。「ハイなくなりました、値を上げます」と言われたってね。あまり精神主義的なものを押しつけなくて不買運動をやるんだったら物を持っていることですよ。仮りにトイレットペーパーが三月分あったんなら、なくなったからと言ってもひと月はジッとしていられると思うね。ひと月ジッとしていれば売る方としても困っちゃうわけでしょう。少くとも、流通機構の中で意識的な滞貨をさせて品薄にして値を吊り上げるなんてことは、そうあからさまにはできないでしょう。日本の石油の備蓄がヨーロッパなんかに比べて少いように、日本の世間一般も備蓄というものをあんまり考えなくて、お金さえあればどこかに行けば天然自然に手に入るという風に飼い慣らされてきていたんですよ。その盲点をパッとつかれちゃって、そこから自己防衛を働かすという風にはいかないで、逆にやっぱり豊かなことはいいし、公害とか何とか騒いでいたけどABSがどうのこうのというよりも食器がきれいになるとか、肌着が真白にピカピカに光っているのはいいという方にいってしまったわけですよ。

——だけど、どう考えたってあのアメリカがあのアラビアの諸国にそうそう鼻ヅラひきまわせられるのはおかしいと思ったし、誰でもそのぐらいのことはわかると思う。だけど、具体的に10%か15%削減されると、本当に日本は石油漬けになっているから、石油漬けになっている財界の体質の上に成り立っているのが自民党だからね、それで血が頭にのぼっちゃってああいうことをしたんだと思うけどね。その結果一番得をしたのは、勿論アメリカだし、メジャーと呼ばれるところかも知れないけど。これはまた、日本は非常に得をしているわけですよ。

財界の方からいうとそれまでにアンバランスなことが色々とあったと思うね。例えば公害除去装置に金をかけなきゃならないとか、公共的な料金は据え置かなければならないとか、それをなんとかうまくやろうと思うけど、今のところ田中の人気が落ちてきちゃって、そんなことをしたらなおさらよくないというので、値段を政治的に抑えられていた。そこへもってきてアブラがああいうふうになったからソレッというんでね。向うの方が情報網は政界より発達しているよ。政界というのは国内だけ見てればいいんだけど、財界や商社というのは外国を見ていなくちゃならないからね。当然、これが一つの戦略にすぎない、ということを見抜いたと思うね。それなら、これを逆手にとるということで、それに便乗して、アブラ関係じゃないものまでダァーッと上げていくという、そういう先兵に使われたのがトイレットペーパーと洗剤でね。財界にしてみれば本来ならばもっと儲かっていい筈なのが、どうも儲からないという部分がアブラのお蔭でうまくいっちゃった、という面があると思うんですよ。

——それに、田中ナニガシの様々な失政というものもね。日本列島改造計画なんていうものの矛盾なんていうものは随分あったでしょう。国総法（国土総合開発法案）というのがあってね、日本列島改造計画を進めるには、まずこれを通さなければならない、というものだったけど、これは党内からの反対もあってなかなか成立しないんだよね。本来ならば、一国の総理大臣がそれをテーマとしてなったわけでしょう。それがいつの間にかどうにもならなくなっちゃって、四面楚歌で葬り去られて、となったら当然責任を問われるわけですよね。ただひっこめただけじゃ済まないと思う。そんなことなんかみんなすっとんじゃった。

政治家の方にとってみれば何でも「アブラがない」と言っておけば、石油危機の陰にかくれて自分達の失政というものを、ある時期カバーすることができたわけですよ。それに今のインフレーションていうものは様々なひずみのあらわれなんだろうけど、これも石油の方に全部転嫁できるしね。

——一番大きなことは、企業側はまだ言いだしてはいないけど、勤労者とか家族の方に、いつ起こるかわからない公害よりも目の前の贅沢の方がいいという考えを植えつけてしまったことね。今はまったく公害の記事が新聞に載らないでしょう。公害がすっ飛んで、原油が値上りして、企業努力で値上りを未然にふせぐということになると何をやるかというと、公害除去装置を省くことですよ、たぶん。それ以外ないと思う。値上りがイヤならスモッグがちょっとぐらいあったってガマンしろ、とまではハッキリは言わないけど、そういう言い方はするだろうし、あるいは賃金を上げてもらいたかったら、公害のことについてゴタゴタ言うな、という言い方をしてくると思う。これは一番困ると思うね。

——これまで日本の経済というのは成長するのがあたり前、賃金のあがるのがあたり前で、これはたしかにおかしな考え方なんだよね。戦前の歌に「もしも月給が上ったら」という歌があったみたいに、月給の上るのが"もしも"じゃ困るけど、毎年毎年10%も20%も上る国というのは古今東西通じてもなかったと思うよ。戦後のインフレーションの時は別にして平和な時に。それに慣れちゃっているわけだ、オレたちは。勿論、賃金を上げなけゃならないのは恒常的インフレがある、その為には生活防衛として賃金を上げてもらわなければ困る、それは当然の権利であると考えるのはそうだけども、それを実行していくために、いかに我々が失っているものが多いかとか、あるいは海外に対してひどいことをしているか、ということを反省すればね、賃金闘争だけじゃない闘争の仕方というものもあっただろうと思うんだけど。ちょっと精神主義的になってくるけどね。

それを向うからやられちゃった。石油危機によって一時休暇とか、レイ・オフとか、首切りとか、全然新卒をとらない、と言うところがでてきたり。つまり脅しにかかったわけですよね、もはや繁栄の時代は終ったと。繁栄とその裏にある荒廃を見くらべて荒廃がもたらす被害を考えて繁栄をすてるというのを僕らの方からやったんならいいんだけど、向うの方から石油危機にこれまた便乗して、お前たちこれまでは調子に乗って、やれスト権だ何だと言って、賃金を上げると言ってきたけど、こうなったら企業としては、賃金を上げられない、それに成長率ゼロという事態だってあ

るんだし、成長率ゼロの時に賃金が上るわけない、首切るんだって、これまで不当解雇なんてゴチャゴチャ言っていたけど、会社が潰れるか潰れないかという時にいたし方ないだろう、現実に外国の例を見てみろとか、そういう脅しみたいな格好で来たわけでしょう。

現実にはまだそうなっていないけど、僕なんか新聞の記事見てて、ああまた不景気が来るのか、とかなりイヤな気がしたものね。恐らく勤労者の中にもあったと思うよ。今迄は内部告発的なことをやろうかな、とちょっと思った人も、イヤイヤそんなことをしてはとんでもない、自分の企業だけは守って、お家大事にしなければ自分の食い扶持がなくなる、という風に思ったんじゃないか、と思うね。だから石油危機を理由に不景気の到来をチラつかせて、それで勤労者のお家大事意識を企業エゴイズムにとりこんでしまうような効果もあったんじゃないかと思うね。

だから、あの石油危機がメジャーとかアメリカの陰謀によって作られたものならば、結局それと体質を同じくしている大企業もそれを利用したんだよね。

——われわれ世間の人間というのは、石油が物凄く値上りしているにもかかわらず、一バレルあたり一ドルが八ドルになったって言われたって、よくわからないわけだ。バレルという単位がわからないし、石油の罐にしても十八リットルなんていうから、いちいち一リットルあたりと計算しなきゃいけないでしょ。あのやり方は巧妙というか、どうもこっちの方にひきつけてピンとこないわけですよね。

今まで石油に払っていたのが九十億ドルで、来年は百八十億ドルか二百億ドル払わなければならない、これでは一発でもって日本の経済は破綻してしまうと言われたって、これまたよくわからないわけだ。日本のドルの保有高にしても、五、六年前には三十億ドルと言われていて、それが二年ぐらい前は二百億ドルぐらいになっちゃったといわれたって、自分の実感としては、何を意味しているのかサッパリわからないよね。

だから、それはエライことだ、と思いながらもね、現実に前年に比べて今年はちゃんと入ってきているし、ということにばっかり目が行っちゃってね、それで石油が来てよかったよかった、と言っている。例えば電力制限みたいなことだって、銀座のネオンをいくら消したところで何でもないのに、一応締めつけをやっといて、それをパッとほどくとね、マアよかったよかった、とそっちの方に行っちゃうわけですよ。それで、陰で行なわれている画策とか、実際過酷な条件を押しつけられている、ということには全然目が向いていない。

——今年度物価が上ってきた時に、大企業の人はそれなりに国家から手厚く保護されているからね、それに準じていくらか給料も上るだろうけどね。ひどいのは未組織労働者だろうし、そっちの方が組織されてるほうよりも三倍も多いんでしょう。それから、ここでもって福祉というものがふっとんでしまって、差別というものがもっと強い世の中になってしまうし、そうなると、たいてい差別する側は自分たちの立場をもっとハッキリ守ろうという防衛本能が強くなってくるから、そこで差別されてる連中に対して、別の形での楽しみを与えてやろうと思って、これはたいていは精神主義ですよ。また、生きがいとかね、国を愛する心とかね。

それともう一つは、アラブごときにあれだけバカにされるのは、日本に武力の裏付けがないからだ、三木特使というのがアッチに行たりこっちに行ったりして、いわば四方拝みたいにしてタイコ持ちをやるとはなんだ、アラブがなんだっていうことで、アメリカが

やらないならこっちがアラブに侵攻して石油の確保をするということにはなりゃしないけど、そっちの方向に考え方が進むとね、具合いが悪いと思うし、これから起ってくる様々な事件の中では、そっちにとりこまれる恐れがあるような気がするね。

——石油がボーンと止まって、自衛隊というのが張り子のトラでどうにもならないということだけはハッキリわかったわけですよ。日本を殺すのに原爆もなにもいらないんで、ちょっと海上封鎖したらそれでおしまい。日米安保条約で、それがどれだけ有効かわからないけどね。あの自衛隊に毎年毎年一兆円、物価が上ると自然にスライドするから二兆円ぐらいにしないと四次防というのは到達できないと思うよ。二兆円の金つかって、あんなバカげたことをやっているのならね、バカバカしいということをどっかの政党がPRするとかね、自衛隊を憲法論のレベルにもってかないで、もっと有効性の問題で言ったら。こんなことを言うと逆にとられるんだけど。

それよりも米を沢山作って東南アジアのように恒常的に飢えているところにどんどん送ってやれば、焼け石に水かも知れないけど、少くとも米は戦略物資たりうるんですよ。米を必要としている国というのは随分あるからね。そのお米が大企業進出の単なる包装紙みたいなものになっちゃ困るけど。日本がその気になって米つくったら恐らく今でも一億一千万石ぐらいはつくれるらしいね、農協の人に聞いてみたら。ただ、そういう米の作り方が、日本の土地を荒していることに結果的にはなるから、それはすすめられないけどね。といって、日本の土地にもう一度ウンコをまいてもまにあうもんじゃないからね。自衛隊をおいとくんならね、その金と自衛隊にある機械でもってね、日本の土地をもっと改良していってね、それで米つくって、東南アジアに戦略物資みたいなつもりでもって送っておけば、向うでもこっちを悪く思わないだろうし、イザ日本が何かが足りないという時にはね、あそこらへんには石油はないにしても鉱石はあるからね。すぐに売ってもらえるかも知れないしね。それをなんで米をくだいてブタに食わしちゃうのか、そこらへんがわかんないんだけどね。

——ただ農業問題を言うとね、必ずいうのは、農業問題を新しい発想でもってやっていくには金がなければならない、そのためには輸出を振興してドルを稼いで国土をキチンと整備して、という発想がズーッとあるんだね、坂本二郎なんかにはね。これはもう破綻していると思うんだよね。そんなことをいくらくりかえしたって、大企業が自分たちの儲けを吐き出さなかったらね。いくらそんなこと言ってもしょうがないしね。

——日本には事実米は豊かにあるけどね、パニックという状態になった時に、いかに日本人が米を中心にした生活から離れてるといっても、その深刻さはトイレットペーパーとか洗剤なんかの比ではないですよ。

農林省はここんところ、減反政策をやめさせようと思っているんだけどね。あまりにもみっともないので困っているんだよね。彼らは「家畜の飼料をまかなうために米をつくれ」という風にいってるわけよ。そうでも言わないと都合悪いわけですよ。それで今迄は休耕田で一率三万円ずつ払っていたわけだけど、これをやめて米をつくることの奨励金ていう格好に切りかえるとかね。農地整理という名をかりて全部休耕しているところには休耕補償金を払わないとかね。そんなことを打

ち出してきて、ジワジワと休耕をやめさせようとしているね。あれは朝令暮改もいいところで、四十四、五年までは作れ作れ、と言っといて、ハイ今度は作っちゃいけません、ハイ今度は作ってください、ではいかになんでもみっともないので、農林省としては公式的見解としては言わないけどね。各農村事務所を通じてひそかに言ってるんだよね。今迄休耕田がキチンと達成されていなかったところにはイイ顔をしなかったんですよ。今迄も休耕はしなくてもよかったんですよ。米をつくったっていいんだけど、買い上げてくれないわけだよ。それだけの話だけど、今は無制限に買い上げるという格好で休耕をやめさせるようにしているわけよ。

それは何故かというと、日本をとりまく環境が、世界的食糧不足みたいなこともあるし、気候的な変化ということもあってね、やはり危機感が随分強くなっていますよ、農林省は。

――アメリカが本気で怒ったらアラブなんかはふっとぶと思うよ。そうなったらアラブの石油漬けになっている日本なんかひとたまりもない。奴隷以下の存在だね。植民地なんてもんじゃない。施設だけ利用されてあがりは全部向うにもって行かれるという。

そうならないためには農業国に戻った方がいいんですよ。アメリカとかアングロサクソンとかゲルマンとかそんなのをオレは信用しないね。あれは鬼畜だと思うよ。あっちの方が考え方がきびしいですよ。日本人だけだよ、ノンビリしているのは。

どんどこ施設ばっかり作って、そこにアメリカは材料を送りこんで、出来た物を安く買いたいたいてもっていく。つまり公害をもたらすようなものをすべてこっちにおしつけて、こっちはそれによって得たかすかなドルによって、アメリカから高い小麦とか高い家畜飼料を買ってこなければやっていけない、という状態でしょう。これはかつての東インド会社が支配していた時のインドと同じじゃないの、アッサムとかベンガルとか、かつてのフィリピンとかと。新しい形での植民地にされてしまうし、その植民地はかつての植民地がまだ牧歌的だと思われるような陰惨な状態になるんじゃないかと思うね。

しかも、なまじそれが繁栄という錯覚によって、まだ支え続けられている場合は、絶対革命なんて起きないよ。恐らく個人個人の逃避は行なわれるかもわからないけどね、つまり麻薬に逃避するとかね。でも、こうなったらオレは暴動も期待できないし麻薬もどんな力にもなりはしない、むしろ自然淘汰として向うによろこばれちゃうんじゃないか、という気がするよ。

今だってかなりそんな芽はあるんじゃないの日本は。なんでそんなに農業生産を制限して工場製品の輸出をやって、そのために公害をまきちらして、それで得たドルは向うのつごうしだいで、ハイ切り下げ、ハイ切り上げ、とやられてさ、それで食うためには食料品がいるから、それを向うでもって値段を上げられたら、アッとこっちはビックリ仰天しちゃうみたいなね、こんな独立国なんてあるとは思えないね。

そんな独立国になんで自衛隊がいるのか。アメリカと戦争するつもりなら、それはそれで筋が通っていると思うよ。臥薪嘗胆一切我我は贅沢しない。それでお金をためて、何を作っているかと言えば、精密なる核弾頭を備えたミサイルをつくる。それでそっちがゴチャゴチャいうなら、こっちも共倒れだ、と

やっていくならば、それはそれで軍隊としてスジは通るわけですよ。日本に小麦を売ってくれないのなら、日本が率先して緊張を作り出す。アメリカにとっては、他の要因で緊張を作られたら困るわけですね、自分の方で作るのはいいけどね。だからビックリして小麦を送ってくるとかね。

もし、やるんならそっちをおやりになればいいんで。どうもオレは極論が好きなので、そうでないんなら、一切やめて、自分のところのものは自分のところで食えるといった体制の上でね、何かやっていかないと、結局鼻ヅラひきまわされちゃうよ。

自由か奴隷かっていう言い方をされるとね、オレは奴隷でも生きていた方がいいと思うよ。オレはあんまり、生に対する執着が強い方じゃないけどね、そういう言い方で来られたら。貧しいということがそのあいだに入ってくるなら、貧しいということは、たしかにひどいもんだけど、奴隷の豊かさがあるよりも貧しくても自由な方が生き易いと思うね。

戦前の生活で言ったら、中流のサラリーマンの家なら、朝シャケを食ったら、家の人っていうのはその残りのシャケの骨にお湯を入れてお汁にしてこれを飲んでいると、医者しらずとか言ってね。お茶漬というのはお茶漬料理というのがあるのではなくて、残り物でやるものでしょう。スキヤキなんていうのは完全に御馳走で、卵というのはお弁当の中では結構な代物だしね。タラコ一つぐらいで御飯を何杯も飯べて、そういうのが中流サラリーマンの生活だったし、もっと下に行けばお新香二つ三つで飯食っていたんでしょう。あの頃はたしかに短命だったかもしれないけど、今みたいに抗生物質があれば、あの頃だって、そんなに死ななかったと思うよ。あそこに戻りゃいいんだよね。だけど、これぞどこの民族もなしとげなかったことだろうね、貧しさへ向うというのは。国民的大号令が発せられなければ実現できやしないね。それに貧しさを支えるだけの精神的なものがなければね。精神的なものというのは結局マゾヒスティックな指向だからね。

――もうこうなったら食糧危機でもいいから一ぺん来て、何か体質改善をしないとね。石油危機による公害の減少なんていうのは考えられなくなっちゃったし、自家用車の制限なんていうのも簡単にすっ飛んじゃったでしょう。もっと大本でいえば公害除去装置をはぶいちゃって、利益の追求をはかるだろうし、世間もそれを恐らく許すだろうから、ある時期まで今のままのが続いて、それで物価高に慣れちゃった時に、また衝撃的な第二、第三の水俣が出てきて、もう一ぺん改めてそれをやりはじめるということのくり返しで、すでにそれは先に先にのばされたまま、ある程度ひどい状態がね、奇型児がふえるとかね、近海漁業が完全にダウンするとかね、そういうことが起ってくるんじゃないの。

だから早く飢饉がないかと思うね。そうすれば何が大事かということが少しはわかるんじゃないかと思うね。ただ農業国に戻ると言ったって、戦争中とまったく同じでよほどのことがなければ、原爆みたいなものが落ちなかったら、終戦の詔勅というものは出されなかっただろうし、それを受け入れる下地も出きてはいなかったですよ。シンガポール陥落の時に、「世界平和のために朕は戦争をやめる」と言っても全然誰も聞かなかっただろうからね。

（談・文責編集部）

（イラスト・篠原勝之）

●ある感覚

生活不安解消をめざした国民生活安定審議会に一般消費者代表として評論家上坂冬子さんの姿もみえた。自由が丘のマンションに一人住まいの上坂冬子さん、新聞記者に「お宅で洗剤は?」と質問されると、「ここ半月くらい、いただいたフランス製の香水入り化粧石けんで洗ってます」。砂糖は「お歳暮でもらったのがあって、愛知の母にわけたら喜ばれた」。トイレットペーパーは「買えなくて、都内にいる兄弟から融通してもらった」という返事。「ウチは一人だから使う量も少ない」と付け加え、「お歳暮の砂糖や食用油のストックはどこの家にもあると思う」とおっしゃった。(読売・一・一一)

＊上坂さんは「知る権利」裁判の判決については、「西山記者の無罪はナットク出来ない、蓮見さんの行為は汚職だ」(毎日・一・三一・夕)とも。

●すてきなおみやげ

ハワイは年末年始に三万人近くの日本人観光客でにぎわったが、一月九日のスター・ブリティン紙は、これら観光客がお土産にトイレットペーパー、砂糖、せっけんはおろか日本製のウイスキーまでも買い込んで日本に持ち帰ったと報じた。ワイキキウルワース百貨店の支店では、約二キロ入りの砂糖袋が日本人観光客たちの買い占めで全部売り切れたほか、トイレットペーパーを大量に買って船便で送った人もおり、ワイキキ商店街では品不足が特に目立っている。(読売・一・一一)

一方、八丈島でも、今年はじめ訪れた観光団は、ほとんど全員が家庭用洗剤を手みやげに、飛行機に乗り込んだという。(朝日・一・二三)

＊ハワイへ行ってトリスを飲もう!

●よみがえる洗剤

埼玉県戸田市と同県入間郡三芳町で、洗剤が倉庫にぎっしり詰まっていると消費者の通報があった。調べてみるとプロクター・アンド・ギャンブル・サンホーム社の洗剤で「全温度チアー」。メーカー側の説明では洗たく物が青く染まると指摘された欠陥商品。県消費生活課でテストした結果もやはり不良品とわかった。しかし近所の主婦らが倉庫に押しかけ「欠陥だっておむつや下着は洗えるのだから説明書を付けて売ってほしい」などと一時間半にわたって食い下がった。(読売・一・一九)

洗剤不足の最中、埼玉県和光市で五百グラムの洗剤の小箱が、一家に一箱百円で売出された。主婦グループの暮しの会がメーカーにかけ合い、市を動かした結果である。ところが、かつてこのグループは同じメーカーの工場にゆき、中性洗剤の安全性のことでわたりあったことがある。(読売・一・一九) ＊「必要」の前にはあらゆる心くばりが簡単に押し流される。欠陥商品でも、汚染物質でも。そして「必要」の中身もきまって吟味されていない。

●春闘の見通しについて……

小松左京　ものすごうデモかけて、解散にもちこんで、あとは社公共の連立政権?

太田　薫　いや、解散にもちこむ気はありませんね。田中から福田に代わるだけです。財界もそれを要望してますよ。革新内閣なんてスケベ根性をおこしたらいかんです。破局にもっていかないために、田中から福田に。これでええですよ。野党がとって代わるような力量、ないです。(『週刊朝日』一・四・一一) ＊しかし新しい生命はスケベ根性なしにはうまれてこないのだ。

●日本拡大祈願

「……政治家が自分の衿を正さずに国民に協力を呼びかけたってダメですね。……どうですかね、この際『インフレが収まるまでは謹しみます』といって、ゴルフ断ちくらいしたっていいじゃないですか。昔から何か願いごとをするときには、茶断ちだとか、塩断ちだとかをしたものです。……天皇陛下はもともと、ゴルフがたいへんお好きで、皇居の中に九ホールのゴルフ場をおつくりになったほどだったにもかかわらず、昭和七年(一九三二)の第一次上海事変以来、今日まで、戦中戦後を通じて、いっさいクラブを手にしておられないそうですね。陛下のストイシズムには及びもつかないとしても、まあ今の政治家だって、せめて半年や一年くらいゴルフを断ったっていいんじゃないですかね。……」(江藤淳〝こもんせんす〟『週刊現代』) ＊では天皇はゴルフ断ちしてなにを願ったのだろう。それから長く暗い戦争の時代が始ったが……。

ああ、わが内なる日本

色川大吉

自分の家庭へも、自分自身にすら三下り半を書けぬ奴が、なんで「日本への三下り半」など書けるものか。おこがましい、と思ったら自己嫌悪が昂じてシラケ切ってしまった。人間いったんシラケると想像力が湧かぬものだ。日本が嫌になったら出てゆけばよいのだ。出られるものなら騒がず黙って出てゆけばよい。君が出ていったってべつになんにも変りはしない。出てゆけぬ奴にかぎって「脱出願望」を騒ぎ立ててあるくのだ。人間の顔をして人間の心を持っている人間が、この地上のどこにも何十億人といる。言葉なんてひとことも分らなくても、心は通うし、よほどの悪党か病人か鼻持ならない傲慢者でないかぎり、この地球上のどこででも暮せる。受けいれられる。ほんとうに日本に愛想が尽きはてたなら、気のむくまま足のむくままどこへでもいって虫のように生きればよいのだ。

だが、かなしいかな、一人になると全く弱い日本人は、夢みることは多くても実行はできない。だからこうしたイメージのマスターベーションがくりかえされるのであろう。「日本」への三下り半というが「日本」とはなんなのだ。「日本国」のことか「日本人」のことか、「日本社会=世間」のことか、日本人的意識で充満した自己自身のことか。そのすべてか。国家なんかクソくらえであろう。日本社会だって捨て去ることはむずかしくない。だが、日本人べったりの自己自身は、どこへ逃れようと、たとえ地の果てに逼塞してみようと、逃げきることはできない。まず、べったりと内側にくっついている陰湿な精神の天皇制は、住む場所を変えただけで、眼を蔽っただけで、ジメジメした人間関係を断ちきっただけで解消できるであろうか。私はそんなことではこの業病から自由になることはできないと思う。

この「日本」と訣別する二つの形の旅立ちがあった。一つは、遠いどこかの辺境にではない、足もとの「日本」ではない日本の底部にもぐりこむことであった。私はそれを試みた。だが、そこも孤絶境でないかぎり、やたら隙間風が吹きこんだ。ときには鼻先までダンプがとびこんだり、家出した娘が町から帰ってきて父なし児を産み捨てたり、息子が車庫の奥で首を吊ったりした。鼓腹撃壤のはずの自治境は幻視の世界でもなくなった。そこに充満した空気は絶望と怒りと虚無の臭いを帯びだし、そこに居直るしかないと信じこませると同時に、おれも遊行者や遊行女婦のような境涯に心魅かれた。

もう一つの形は全くその日暮しの、あてどのない放浪をこの地球上のどこへでも試みることであった。それは身銭さえ切れば、ある覚悟さえきめれば、だれにでもできる。ほとんど人のすまぬ辺境へもゆくことはできる。桃源境で、しばしの昼寝の夢をむさぼることもできる。自他を突き放した刺すような眼で見かえすこともできる。だが、ああ、わが内なる日本人から逃れ切ることができるだろうか。本質的にはなに一つ変ることのできなかった私がここにある。「日本」に舞戻って、自分への三下り半を書くべきか、否かに迷っている私がある。

日本への三下り半